

第1回高知県社会教育委員会（平成27年2月1日～平成29年1月31日任期）会議概要

平成27年3月19日（木）13:30～16:30

高知県庁西庁舎 2階 教育委員室

1. 開会（13:00～13:05）

- （1）高知県教育長挨拶
- （2）辞令交付
- （3）自己紹介

2. 社会教育法及び高知県社会教育委員条例等について

3. 委員長及び副委員長選出

4. 議事（13:05～16:00）

協議

「中山間地域のコミュニティの活性化～ふるさとを愛する心を育む体験活動を中心として～」

【事務局より説明】

【質疑・協議】

（委員長）

事務局から、テーマ設定理由と内容及び2年間のスケジュールについて説明があったが、会議の進め方を含め、ご質問やご意見があれば。

（委員）

テーマ設定の趣旨、協議の柱の説明から、子どもの体験活動を豊かにする。そこに大人が力を結集し取り組むことで、結果としてコミュニティの活性化につながるという、大きな枠組みとしては理解した。そのとき、PTAはもとより子ども会等の役割というのは非常に大きいと思うが、高知県の状況はどうなのか。また、今回のテーマにどのように位置づくのかを考えてみたい。

（委員長）

次回、事務局からの現状と課題に関する説明の中に子ども会について盛り込んでもらうことで、一つの方向性が見えてくると思う。子どもたちの体験活動を充実させることに、大人が関わりながら、それを通じて地域の活性化ということに貢献するという、社会教育としてやっていることを発信していくということですね。

（委員）

テーマに中山間という言葉が入っている。これまでの経過を踏まえてのこととは思いますが、この点について詳しく説明して欲しい。

（委員長）

事務局側から補足説明があればお願いします。

(事務局)

実は、教育委員の方々に、今回の社会教育委員会のテーマについてお話した際、中山間にこだわる必要はないのでは、むしろ都市部のコミュニティが非常に弱くなっているというご意見をいただいた。

事務局としては、中山間という言葉盛り込むか否かということを含めて、今回の第1回目の協議テーマの設定の中で、委員の皆さまのご意見を参考に決めたいと考えている。

(委員)

高知県全体が、だんだん人口が減り活気がなくなっている。そこを何とかしなければ、という緊急の課題であるとの認識から中山間と盛込んだのではと察するがいかがか。

(事務局)

まさにそういう意味合いから、中山間というテーマで議論いただきたいと考えた。

(委員長)

冒頭の教育長挨拶でもあったが、子どもたちのおかれている環境を考えると、課題は中山間地域に限ったことではなく、安心と体験の不足ということでは、むしろ高知県全体の課題であるというふうに私は理解している。

テーマに中山間地域という言葉が使われているので、そこでの成功例などにも触れながら、方向性を示していく必要はあると思うが、必ずしもそこにこだわる必要はないのではと考える。

子どもたちの体験活動という点について、高知県全体の現状のデータや資料をつかんでおかないと、具体的な姿が見えてこないのではと思うが、清國委員、その辺りはいかがか。

(委員)

香川県は面積が小さく、あまり中山間地域とか僻地といった感覚はないけれども、高知県や、私が以前いた島根県では同様な状況にあると思う。例えば、子どもたちの活動を考えるとき、学校の統廃合がどれくらい進んでいて、バスやタクシー通学がどれくらい実施されているか等、地域の中での子どもたちの姿の見え方についてどうなのか。

ふるさとを愛する心を育む部分では、学校を中心に考えた方がいいのか、生まれて生活している場所を中心に考えた方がいいのか、地域はどう関わればいいのか等、他に先駆けて、数値化・データ化したり、問題点が確認できると高知県の課題が浮き彫りになるような提言、答申になると感じている。

(委員)

学校の統廃合ばかりでなく、子ども会も統廃合が進み、子ども会自体がどんどんなくなっている現状がある。もう一つはスポーツ少年団等、スポーツにかかわる子どもたちの組織も中山間地域を中心に随分と衰退化している。学校、子ども会、スポーツ少年団、その他のデータをまとめてはどうか。

(委員長)

子どもたちの活動が広がらない理由を考えると、もう少し違ったデータや資料というものが当然必要になってくると思う。各市町村の状況や、学校の取組状況等、今後必要になってくるのではないか。

もう一つ、前回の答申について、私はここでも委員をさせていただいたが、少し総花的になり過ぎたという反省がある。とはいえ、具体的な提案をした中のいくつかで、次年度に反映させていただいているものがある。今回の委員会でも、提言したことが一つでも二つでも新しい試みとして、取組が広がっていくものにしたい。

(事務局)

前回の答申を受け、来年度予算化をさせていただいたものをいくつかご紹介したい。

まず、教員の理解を促進するための研修を実施したいと考えている。

次に、各市町村の教員の方々に社会教育主事の資格をとっていただくための予算を、少しだが確保した。

また、社会教育実践交流会を開催するための予算を計上している。

(委員長)

国の答申が出ているが、それについて事務局から説明をお願いしたい。

(事務局説明)

(委員長)

国の方向性の共通理解を図っておく必要があり、それとの関連をどのように図っていくかが大事なことであるため説明していただいた。

この委員会のテーマには、ふるさとを愛する心を育むという副題がついている。国の答申では、ここの部分はあまり触れられていない。体験の意義や効果については出てくるが、ふるさとを愛するという部分は、工夫の余地があると考えられる。これについては、今後、協議をしていきたい。

答申をお持ちの方は12ページを開けていただきたい。青少年教育機構、青少年の家等が出している報告書をもとに、発達段階別の体験活動について書かれているが、それが良い悪いということではなく、発達段階というものをどのように考えていくのか議論が必要だと思う。

ふるさとを愛する心と、体験の力というところが、どう関連してくるのか。この委員会で検討したい一つではないかと考えている。

(休憩)

(委員長)

日頃、それぞれが取り組んでいることをご報告いただきたい。

(委員)

P T A活動を20年ぐらい続けながら、今では地域の青少年育成委員や、交通安全指導員、また子育て支援等、さまざまな分野の支援をさせてもらっている。その中で、地域活動の大切さを日々感じている。

今回のテーマは、中山間の地域のコミュニティの活性化ということだが、中山間地域を考えながら、中心地域の高知市内の現状等も今後絡めていただきたいという思いもある。

高知市の潮江地域では、「わんぱくこうち」という小さな動物園・遊園施設で、「こども祭&防災フェスティバル」を開催していて、5回目を数える。

潮江の場合は、防災上、本当に危険地域と言われている。その中で防災教育は、小学校、中学校、高等学校を含めて地域で連携をとって取り組まれている。フェスティバルでは、消防団はじめ、民間の企業の方たちが防災グッズの展示販売をしたり、防災分野の体験活動を提供している。また、子どもの体験遊びでは、香美市の情報交流館の森林センターや安芸市の木工関係の方等、いろいろな地域から協力を得ている。地元の潮江中学校の生徒会や防災プロジェクトチームの生徒たちが、ゲームをしてくれたり、司会進行や音響等の運営も行っている。今年からは、高知南中等学校の参画もあり、マンガ研究部の子どもたちに防災フェスティバルのキャラクター「ぼうくん、さいちゃん」を描いてもらった。子どもたちが興味関心をもつことを大事にしてあげて、発表の機会を提供することが必要で、子どもたちの自立

する力を伸ばすためには、お客さんではなくて、一緒に参画することが大事だと思っている。

先日、県の青年団の会長と話す機会があった。青年団と高知大学の学生たちが、高知を離れる学生のために「高知家の卒業式」を企画している。高知で過ごした若者が、帰った地域でいろいろ活動してくれる。高知大学に、新しく地域協働部ができれば高知大の学生さんが地域に入っていく、そういう流れの中で青年団との絡みというものすごく大事になると考える。また、今、引きこもりの若者へのいろいろな支援をしているが、きっかけをつくってあげることが大事で、これから青年活動と引きこもっている若者たちを、どこでどのようにつなげてあげられるかということに発展できるのではないかと期待している。

(委員長)

子どもたちが中心になり企画し、ふんだんに体験の要素を組み込んだ祭りイベントのご紹介だった。さまざまな人が参加するところに、ちょっと体験的な要素を組み込むやり方も非常に大事で、中山間といわずに、むしろ高知市内で体験を通して中山間とつながれるという大変大きな視点に立ったお話だった。

(委員長)

土佐山アカデミーの話をお願いします。

(委員)

土佐山アカデミーは、平成24年の10月1日にNPO法人化して3年目になる。高知の土佐山の社会学一体教育が脈々と根付いてきていた地域で、いかに交流人口を増やし、地域の資源を次世代につなぎ、自然に近い暮らしや、そういった社会の仕組みを提案できる学びの場を創設していけるだろうかということで活動してきた。

人口がどんどん減少していく中で、日本の大部分が抱える中山間地域の課題に対して、地域が、中山間が元気でない都市も元気になるか考えている。

「次の100年のために、地域の資源を活かし、新たな出会いやアイデアを育む、学びの場です」というビジョンを掲げている。100年と聞くと長く感じるかもしれないが、要は自分の孫の世代まで考えるということ。独身の若い方から定年退職された60代の方まで、さまざまな方々に3カ月という期間を設けて実際に暮らしながら学んでもらっている。大人の方向けに体験活動を行っているが、この体験活動は、もちろん子どもが体験しても十分楽しいものである。

都会の日常の中で、無機質なオフィスでパソコンにだけ向かっている大人の方が、土佐山アカデミーの活動に目を向けてくださることが多い。子どもに体験した川のせせらぎだったり、野鳥の鳴き声など、何気ないプログラムであっても、都会の方は、すごく感動して帰ってくださる。幅広い方を対象に、いろいろなイベントを行っているので、一度時間があれば見ていただきたい。

土佐山地域には、四方竹やユズやショウガなどの名産があって、それを地域の活性化に生かそうというアイデアを出し合っている人たちがいるが、土佐山での取り組みがヒントになり、日本全国のいろんな中山間地域で地域が元気になっていくきっかけづくりができればと思っている。

(委員長)

県内の人だけを対象にする必要は全然ないわけで、県内の体験の機会が、全国の方々に及ぼす影響も考えていく必要がある。高知県西部の幡多地域には、いろいろな体験活動が至るところにある。川であったり海であったり山であったり、それらをコーディネートしながら、県外から人を呼んでくる。体験活動を観光などに地域資源として発信していく試みも大事だと思う。

体験というと、非日常性というのが一つキーワードとして出てくるが、日常そのものをもう一度見直すという意味で、体験というのは、日常性そのものだと考えてもいいのかもしれない。これまでは、何か非日常的なことを体験することで、自分を伸ばすというふうと考えられてきたけれども、むしろ日常を体験することが必要だ。学校教育がフォーマル

エデュケーションだとすれば、社会教育はノーフォーマルエデュケーションというふうに言われるが、やはり日常性というものをいかに体験的に学んでいくか、ここに重きがあるのではないかと考えている。土佐山の取り組みは、まさにそうであると感じた。

(委員)

(ビデオ上映)

これは都市型の遊びの体験ということだが、この活動を12年間続けている。月に1回、およそ60~70人は最低でも参加している。といっても1,200人の規模の小学校なので、10%も来てないということになる。台風などの警報が出ない限り屋外で行っている。さすがに雨が降ると30人ぐらいに減ってしまうが、それでも実施している。火も使えるので、今一番人気があるのはマシュマロを焼いて食べたり、イモを焼いたりすること。

私が島根大学に勤務しているころに始めた竹の遊具があるが、昨年、ひもが切れて落下して腰の骨を折る事故があった。そのことについて新聞記者が記事にまとめてくださったものを読んでいただきたい。当然危機管理はやらなければならない。プレーパークというのは、それぞれの地域でもやっておられると思うので、取り立てて珍しいことではないが、私の活動の部分を紹介させていただいた。

早くやって来る子どもの中には、母子家庭の子どももいて、家を追い出されるのか、早く来れば大人を独占できるので、そういう意味で愛情不足の子どもも一定受け入れながら行っている。いろいろな意味で、都市の中の問題がここに集まってきているという部分もある。

発達障害の子どもも来たりして、対応に苦慮することもあるけれども、みんなで課題を共有して、解決にはならなくても一緒に遊ぼうということで行っている。

(委員長)

プレーパーク、遊び場を多様につくっていくという試みだが、高知県の場合、案外少ない。遊び場をどう充実させていくか、非常に大事な視点である。

(委員)

「嶺北高校振興会」これはOBも含めたPTAが集まりできた、嶺北高校の振興について考える会である。

「嶺北41」これは、生徒数が減少したことを受け、41名の生徒数を確保しようということで、学校、PTA、行政、議会、地域の方々が集まり、5年ほど前にできた任意団体。高校の健全な存続と発展は地域振興の要であるという位置づけで定期的に会議を開いている。一昨年の11月に「10年後の嶺北高校を目指して」という提言書をまとめて、地域・学校・行政に配布し、その提言書に基づいた活動を展開している。

「小中学校PTA顧問会」これは、PTAの役員をしてきた者が集まりできた学校応援団のような会である。それから「土佐町Happinessスポーツクラブ」これは土佐町の総合型のスポーツクラブで、もとは土佐町の体育会がベースになって立ち上げたが、キッズクラブ、早明浦ダムの湖面を利用したスポーツを行うNPO法人、老人クラブ、婦人会、青年団等も新たに加入し、地域コミュニティの中心になることを目標に活動している総合型の地域スポーツクラブである。

他には、地域の少年剣道の指導をしている。少年剣道、中学校の剣道部、高校の剣道部、一般も含め活動している。お年寄りとの交流もやっていて、土佐町には子どものいない集落がたくさんあって、そこへ出かけて行って、少年剣道の練習を見てもらい、昼ご飯を一緒に食べる。そういう体験をさせると、剣道は勝った負けたの世界で、活躍できる子と活躍できない子とがはっきりするが、ボランティア活動とか地域貢献活動は勝ち負けがなく、全員が主役になれ、達成感もある。

小学校では、地域に出向き地域行事へ参加したり、防災マップの作成などに取り組んでいる。中学校においては、1年生は土佐町のお宝発見ということで、地域の民謡「草刈り唄」や、百万遍祭りというお祭りを見学したり、地域の方に聞き取りをして、まとめて発表する取り組みを行っている。2年生になると職場体験。3年生では、道の駅で土佐町

のPRをしている。

高校生は、自主防犯組織「嶺北フリューゲルス」、環境保護組織「嶺北エコ FLUGELS」、食品開発に取り組む「嶺北ユースネイバース」、自主防災組織「嶺北ガーディアン・エンジェルズ」等の活動をプロジェクト 41 と一緒になって、嶺北高校の魅力化ということで取り組んでいる。

地域にかかわり発表の場をいただくということで、子どもたちは地域に感謝をする。また、地域の方に感謝される喜びを感じることができる。そこから自己肯定感が生まれてくるのではないかと考える。生徒に対するアンケート調査では、嶺北高校生の 80%以上が将来地元に戻り、何らかの貢献をしたいと答えている。すぐには帰ってこれなくても、将来的には嶺北へ帰ってきたいという子どもが 80%いるということは、自己肯定感の高まりができていていると考える。また、生徒たちの進路選択においても、いい影響が出ていると感じている。

去年も今年も、6名の生徒が国公立大学に合格している。このことから、生徒に対する取組が評価されているのではと感じている。

(委員長)

子どもたちが地域に出て行って、いろいろな体験を通して、地域の役に立ちながら自分の肯定感を高めていく、そういう仕組みが土佐町でいろいろつくられている。それから、高校生が地域とかかわることが、ふるさと意識をどう高めていくかという意味で、非常に分かりやすい事例ではないかなと思う。嶺北の他には、大方高校もコミュニティスクールの指定を受けているし、佐川高校も、これから地域に出ていこうという動きがある。

(委員)

私は現在、文科省のコミュニティマイスターという役に就いて2年目になる。いきさつは、土佐の教育改革の時代に校長として、学力向上と保護者や地域と連携して子どもを健全に育てること、この二つで、絶対負けない学校にしようということで取り組んでいた。

平成 13 年度に文科省から、開かれた学校づくりの調査研究協力校になって欲しいと頼まれ、高知県で 1 校だけ指定を受け取り組むことになった。その中で、コミュニティ・スクールのことを知り、非常に興味を持ったので、私はやらせて欲しいと手を挙げ指定を受けた。以降、久礼中学校と大野見中学校の 2 校で 6 年間取り組んだ。最初は手探りで、よく高知大学へ足を運んで内田先生に相談した。

私が始めたときには、コミュニティ・スクールの数は全国で 17 校だった。現在は、ほぼ 2,000 校となっている。ただし、全国に 3 万校の学校があるので、まだ 7%ぐらいでしかない。高知県は 30 校ぐらいで、比較的多い方である。

国では、教育再生会議ですべての学校をコミュニティ・スクールにしたい趣旨の提言をしている。コミュニティ・スクールが子どもの健全育成の切り札になるのではと真剣に考えているのだ。そういうことで非常に注目されていると思う。ただ、数字のうえでコミュニティ・スクールであるかないかは、あまり関係ないことである。例えば、愛媛県は数は少ないけれども、実質的に立派なコミュニティ・スクールが幾つもある。

コミュニティ・スクールというと学校運営協議会がクローズアップされがちだが、ねらいは学校をもっと開いてほしいということ。もう一つは、信頼される学校にしてほしいということである。

私は、協議したことは実績ではなく、行動してはじめて実績なのだと考える。学校運営協議会の運営に精いっぱい、行動が伴わない学校、それが成功していない学校の特徴である。コミュニティ・スクールになっている学校は、保護者や地域社会、関係機関と連携して、どのように子どもを育てていますと説明できる学校であり、地域にこのように貢献していますと説明できる学校である。

今後は、子どもたちに生きる力をしっかり身につけさせることが非常に大事だと思う。一人の人間として、きちんと身につけておかなければならないルールやマナーがある。それをはっきりと示してあげることが大事であると思う。

また、子どもたちの実践力をどう保証するか。保護者の願いはそこにある。アンケート調査結果から、保護者が学校に期待していることは、点数ではなく、将来ルールをきちんと守れる子どもにしてほしい。就職したとき困らないよう

に、協働して取り組む力を育てほしいということである。

本日の資料を見て、非常に興味がある点は、体験活動と体験学習の違いを、はっきり区別する必要があると思うことである。

(委員長)

先生は、コミュニティ・スクールを支援されながら、体験活動と体験学習の違いはどのようなところにあるのか、ずっと課題意識をお持ちである。「やりっ放し、体験しっ放し」とよく言われるが、やはり振り返りであったり、あるいは事前の準備であったり、意図的な教育活動には、目標があり、内容があり、それに伴う方法があり、それらが一体セットになってこそ、体験というものが身についていく。

(委員)

幼稚園創立45年。24年前から「すくすくの森」という3,000坪の森を所有しており、そこでの自然体験をどう表現につなげるかというところが、うちの園の特色になっている。

園庭で子どもたちがミミズを見たとき、バケツを持ってきて水を掛けようとした。子どもたちは、すごく距離感を感じている。森でミミズに会ったときには、子どもはそんなことはしない。むしろかかわってみようとする。このことから、フィールドの質というものが、子どもの心と体に与える違いがあると感じている。

私は、5年前に高知に帰ってきて、家を継ぐ形で3年前に園長になった。「帰ってきて何が良かった」とよく聞かれるが「高知の空と海が好きだ」と答える。そして都会から高知に帰ってきた人の多くが、同じことを言うと聞いた。それだけ、高知の自然は、深く県民の心に根付いているのだと思う。しかし、いざ自然体験となると、体験、経験の薄さが如実に出る。森にハイヒールで来ることもあるし、子どもを遊ばせる際の安全を守るために、何メートル置きに人を配置すればよいという発想になることもある。子どもに自然の大切さや素晴らしさを伝えたい若い大人側に、その思いを現実化する具体的なルートがすっぱりと抜けて落ちているのが現状である。

本園が大切にしているところで、社会教育的な側面にPTAの存在がある。当園のPTAのなかに、小学校に行く態度が変わる人がある。その背景には、信頼関係が見え隠れする。その信頼関係は、参加の度合いによって左右されるものではないかと感じている。当園のPTA活動は非常に盛んで、子どものためということが一番であるが、それと同時に、自分を表現する場としても機能している。その大人の営みを見て、子どもたちが憧れて真似している。そこにお母さんたちがやりがいを感じている。

自然体験というと、特別な人がいて、子どもが特別な体験をするやり方もあるけれど、特別ではない周りの大人とのより日常的なかかわりが大切であると考えている。

(委員長)

子どもをよく観察されていて、その体験したことを子どもの成長・発達に結びつけようというプロ意識を感じる。体験活動を進めるうえで、非常に大事な視点をお話くださったと思う。

体験というのは、当然参加が原則で、まさに参加なしに体験できるわけではない。幼稚園では親自身が表現する活動を通して、子どもそれを見ながら、共通体験をしていくということ。

(委員)

春野町芳原地区のまちづくり協議会の議長を10年間ほど続けている。高知市に合併する際に、小さいコミュニティの芳原地区が埋没してしまうのではないかと危機感から組織された協議会である。

地域の自治会と公民館、それに新しく組織されたまちづくり協議会が三位一体となり運営しコミュニティを形成していくことを大きな目標としてスタートした。

子ども会や農協の婦人部、地域改善組合等の組織を含め、全員参加の一つのものに仕上げていったわけである。

これは非常に成功した例ではないかと思っている。高知大学や地元の春野高等学校、春野西小学校・東小学校の児童・生徒の方々も協力していただき、いろいろな行事を組み立てていった。その成果は、吉原まちづくり協議会のホームページを検索するとご覧いただける。

それから、歴史民俗資料館の関係では、8年ほど前から館長を務めてきたが、ちょうど私が館長に就任した頃から指定管理者制度が取り入れられ、文化庁からも、そうした施設が博物館的な性格でなく、地域のいわゆる知恵袋としての機能の中心的な存在となるよう方針が出された。そのころの歴史民俗資料館は、岡豊山の上にあり、地域と完全に隔離された状態であった。そこで地域と連携し、歴史を中心にしたまちづくり、地域づくりをしようと考えた。

ご存じのように全国的に有名な紀貫之ゆかりの地であることから、国府史跡保存会を組織し、現在も活動を続けている。毎年11月には「貫之門出の祭り」を開催しており、小学生が「土佐日記」を暗記したり、さらに8月の夏休みを利用して、貫之の墓所といわれる比叡山に参拝をしている。子どもたちが、そうした取組をやっていると、親たちが「子どもがあんなにやりゆうに、自分らも、もっと勉強せないかんじゃないか」ということで、公民館活動の中で活動するようになった。そして地域全体が歴史を中心に盛んに活動をしていただけるようになったわけである。さらに岡豊地区、久礼田地区を巻き込み、土佐のまほろば地区振興協議会というものを組織した。現在は、その活動を南国市全体に広げ進めているところである。

その一つの大きな目玉として、長宗我部元親の銅像の建立を行った。この資金を集めることで地域をまとめたいと考え始めたところ、すぐに岡豊小学校の児童たちが、長宗我部元親に対する興味を深めていき、国府地区が紀貫之なら、岡豊地区は長宗我部だと学校も積極的になっていった。そして、その児童たちが募金活動をはじめたり、長宗我部元親のことを知りたいとガイドの説明を受けるようになっていき、コミュニティが活動するようになった。

私自身、郷土を愛する、ふるさとを愛する心を育てることは、地域を理解することから始まると思っている。そこで地域の資料をどう教材化していくか。私は大学からずっと今までそれに取り組んでいる。

(委員長)

まちづくりの基本に歴史と文化を据えて、そして社会教育施設、この場合、博物館ですが、そこが住民の参加と体験の機会を多様に用意することで地域が動き出していく。体験すると何かを発見し、もう居ても立ってもいられなくなって子どもたちが動き出していく。そういう要素を常に含んでいる体験活動の意義というのが、まちづくりや地域活性化につながっているという話である。

一通り報告していただいた。それぞれご意見あればお願いしたい。成功に導いた原因はここにあったということを出していただければと思うがいかがか。

(委員)

コミュニティ・スクールでは、成功する要因は、学校経営の研究だと思っている。つまり、校長が研究者にならないといけないということ。学校づくりに関しては他人はなかなか口出しできない。もう一つは、関係機関をどう活用するかという点で、それが一番しやすいのは校長だと思う。

注目されている学校はやはり学校体制がしっかりしている。優秀な先生に頼ってはいは、その先生が転任すると消えてしまう。そうではなくて、地域に根づいてなければならない。

それともう一つ、学力以外は地域のいろいろな人材を先生にするという発想が大事だと思う。人権教育とか道徳教育とか生徒指導は学校の先生でなくても立派な指導者がたくさんいる。

(委員)

やはり評価をしてあげることが大事だと思う。自分たちがしたことが、どういう結果につながっているとか、その住民の人からの感謝の言葉を聞くことで、安堵感や達成感といったものが生まれてくる。それが次へとつながって

いくんだと思う。

それとも一つ私が大事だと思うのは、態度教育。どこへ行ってもルールやマナー、礼儀というものがある。それを体験活動を通して学んでほしいと思う。それはすぐにできないかもしれない。でも、社会へ出たときにどういう態度で地域の人たちに接していくのかとかいうことは、最低限吸収してほしい。

(委員)

教えてルールを身につけさせるのではなく、発見させるようにしなければならない。例えば何かするときに、どういうあいさつをすべきとか、どういった服装で行くべきとか、子どもに考えさせて、そして体得していくようなことが大事だと考える。やらされ教育では力にならないのではないか。生きる力を自ら獲得していけるように、大人が仕組みないといけない。

(委員)

無理があってはいけない、無理なくやれる、楽しんでやれることが大事である。やらされるということでは身に付かない。子どもも、大人でも、どんなことができるか自ら考えることで、やる気を伸ばしていくんだと思う。

(委員)

個人がいきなり地域に入っても、なかなか参画しづらい。そこで土佐山アカデミーが間に入ることで、ハードルを下げるができる。事前に情報提供したり、仲立ちをすることでスムーズに出会い、交流を育むことができると思っている。そこを一つ間違えると、何げないことがトラブルになったり、その後の活動に雲泥の差が出る。

(委員)

継続して活動していく中では、きれいごとでは済まされないこともあり、覚悟が必要だと思う。覚悟を持った核になる人物がいるかないかによって、活動が豊かになるか貧しくなるか決まる。ボランティアというと聞こえはいいが、それはボランティアワークで、つまり無償の仕事をしているということ。そういった精神をいかに育むかということが大きな課題である。

それから、事務局をお願いしたい。「まち・ひと・しごと創生法」ができ、それを意識して香川大学でも、高知大学でも、地元何人の学生を就職させるかということが突きつけられている。ならば大学は何をしなければいけないのかというと、地元の中小企業と学生をつないでいかなければならない。地元はどう人材を残すかという課題がある。だから、このふるさとを愛する心についても、そういうことを意識しながら議論した方がいい気がする。

「まち・ひと・しごと」の資料をご提供いただければと思う。

(委員長)

一言で体験活動といっても活動自体も非常に多様化しており、どういう切り口でこれから議論を進めていくか、どんなふうに絞り込んでいくのか考えてみたいと思う。

とはいえ、体験活動の意義等について、いろいろな意味で確認できたのではないかなと思う。これらを踏まえて、次回へつなげていきたいと考える。

時間が参りましたので、事務局へお渡しする。

(事務局)

長時間にわたる協議、誠にありがとうございました。

本日この会議の内容については、事務局でまとめ、委員の皆様様に修正をいただいたうえで、ホームページに公開します。

5. 閉会

高知県教育委員会事務局生涯学習課長挨拶